

こんなときどうする？

## 数学授業コーチング

愛知県刈谷市立刈谷南中学校 神谷 和宏

## 5 思わず「あっ！」と声が出る先輩教師の卓越技

夏休みに入ると、各地で盛んに授業研修会が開かれます。私が数学授業研修を依頼されたときに、よくお話させていただくことのいくつかを紹介いたします。

## 1 自信をもたせる「ほめ方」

まず「ほめて自信をもたせる」のは、子どもをやる気にさせる重要な要素です。例えば、説明の仕方が上手だと認められることは、説明の方法をほめられているのですが、同時にその説明技術を身に付けるまでの努力をも認められたこととなります。子どもは自信をもち、次の課題に積極的にチャレンジしようと思うでしょう。

説明の仕方についての評価は、ややもすると欠点を指摘しがちですが、ほめる効用をもっと活用しなければなりません。

そこで、まず授業でのよいほめ方について、ポイントを整理してみます。

## (1)よい点をほめる

よい点をほめることは簡単に思えますが、意外に難しいものです。案外気付いていませんが、教師自身が自分のレベルを評価の基準とし、そのように子どもをみると、ほめることは難しくなります。子どもをよく観察して、少しでもよいところがあれば、そこをほめるようにしましょう。

## (2)ほめてから欠点を指摘する

ほめてから欠点を指摘するのと、欠点を指摘してからほめるのとでは、まったく受ける印象が違います。まず、最初にほめるようにしましょう。ほめられた印象が強く残りますので、子どもは欠点を指摘されても全体として好

感をもって受け入れることができます。

## (3)ほめるときは具体的にほめる

ほめるときは、具体的にほめましょう。漠然としたほめ言葉は子どもに伝わりにくいものです。「とてもよかった」では何もわかりません。具体的にどこがよかったのかを示すことによって理解が深まり真実味が伝わるのです。

## (4)タイミングよくほめる

ほめるタイミングも大切です。時間がたってから、「そういえば、あのときの君の〇〇はよかったね」では、ほめられてもうれしくありません。情報を入力したら、すぐその場で、タイミングよく子どもをほめます。

## (1)よい点をほめる

教師のレベルを基準に子どもを評価しない  
子どものありのままを観察してよい点を見つける  
少しでもよいところがあればそれをほめる

## (2)ほめてから欠点を指摘する

## 欠点を指摘してからほめる

- ×「まとまりがなかった」
- ×「根拠が十分でなかった」
- ×「考え方がつながってなかった」
- 「声が大きく聞き取りやすかった」

↓  
× ほめられたように感じない

## 最初にほめる

- 「声が大きく聞き取りやすかった」
- ×「まとまりがなかった」
- ×「根拠が十分でなかった」
- ×「考え方がつながってなかった」

↓  
○ ほめられたような感じがする

## (3)ほめるときは具体的にほめる

## 例1

「鈴木さんの説明は、全体的によかったです。よくわかりました」

「全体的」という言葉ではどこがよかったのかまったく伝わっていない。よかった点を具体的にほめる。

↓  
「鈴木さんの説明は、具体的に、1、2、3と順番に数を増やして行って説明したことで、聞いている人によく伝わりました」

## 例2

「佐藤君の話し方がよかったです」

「話し方がよかった」では、どんな話し方であるのかわからない。「声が大きかった」「大切なところを強調していた」など、具体的な態度や動作をほめる。

↓  
「佐藤君は、大きな声で、みんなの目を見ながら説明していました。ときどき笑顔もあって、よく伝わりました」

## ほめ方のポイント

情報を入力したら、すぐその場で、タイミングよく子どもをほめます。

## 2 「視覚」「聴覚」「体感覚」を意識した先輩教師のモデリング

授業をうまく行えるようになるコツは、実は極めて簡単です。上手な人の授業をそのまままねてみればいいのです。コーチングでは、このことを「モデリング」と言います。

コーチングでは、「人生で成功する秘訣は、自分の得たい結果をすでに得ている人や、桁違いの結果を出している人のモデリング（模倣）をすること」だと言われます。授業においても、同じです。そこで、何をモデリングするかが大切です。それが「視覚」「聴覚」「体感覚」です。

人は、どんなときでも五感と呼ばれるもの、すなわち、視覚（Visual）、聴覚（Auditory）、体感覚（Kinesthetic）、嗅覚（Olfactory）、味覚（Gustatory）を通じて外界の情報を認識、記憶し、他者とコミュニケーションをしています。そして、授業などコミュニケーションが必要な際には、その中の「視覚」「聴覚」「体感覚」の3つに頼っています（数学の授業で、「嗅覚」や「味覚」に頼ることはほとんどありません）。

この3つの感覚の英語表記の頭文字をとって、VAKとも言います。

V (Visual)	: 視覚情報…信念, 焦点, 物事を見る視点
A (Auditory)	: 音声情報…言葉の調子, 自分自身との対話
K (Kinesthetic)	: 体感覚……体の使い方

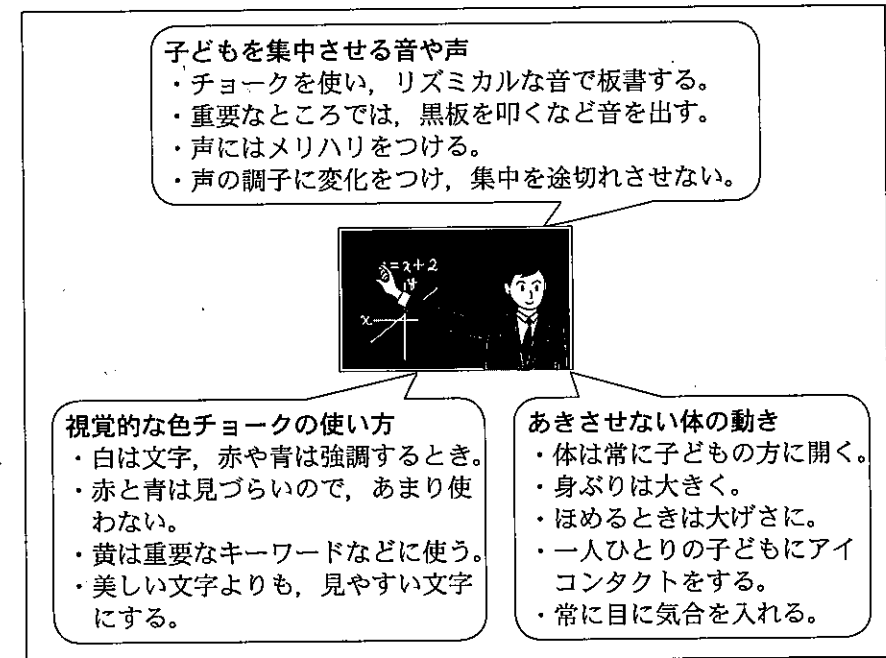
上手な授業をする教師の「視覚」「聴覚」「体感覚」をモデリングすることで、短期間で、その教師の得ている結果に近付くことができます。

以前には、授業づくりの基本的な研修が数多く行われましたが、最近、次にあげるような内容の研修は、めっきり少なくなりました。「視覚」「聴覚」「体感覚」という観点から、まとめ直して紹介します。

例えば、教師の体の向きですが、若い教師の中には、まるで黒板とお話をするように、子どもに背を向けている人がいます。これでは、子どもの状態

や理解度、到達度はまったくわからないでしょう。子どもに背を向けて板書すると、私語も増えて、授業に集中しない子どもが多くなります。これを防ぐためには、教師が常に子どもを注視しながら授業を進めることが求められます。ですから、黒板を見ないで板書するというような練習が以前にはありませんでした。

この他にも、合理的な色チョークの使い方、子どもをあきさせない演技、視線の使い方、話し方など、様々な技術が必要です。上手な授業を行う先輩教師には、「視覚」「聴覚」「体感覚」において、以下のような共通点があります。



「視覚」「聴覚」「体感覚」を意識したモデリング

### <参考文献>

- ・神谷和宏『教師のための「続ける力」コーチング』（学陽書房）